



繪本琉球軍記

初篇

八



~ 13
3554
8



門 へ 13
號 3554
卷 8



繪本圖書
琉球軍記卷之八

目錄

佐野帶刀責落金門城

諸將卒大軍向清風嶺

琉球勢與薩州勢對陣

清風嶺合戰趣意

繪本琉球

目

早稲田大學 圖書館
昭 33.11.10 焚
藏 書

武藏守軍備十段

徐晟大破日本勢

徐晟大破日本勢
武藏守軍備十段
徐晟大破日本勢
武藏守軍備十段
徐晟大破日本勢
武藏守軍備十段
徐晟大破日本勢
武藏守軍備十段
徐晟大破日本勢
武藏守軍備十段

繪本琉球軍記初篇 卷之八

佐野帯刀責落金門城

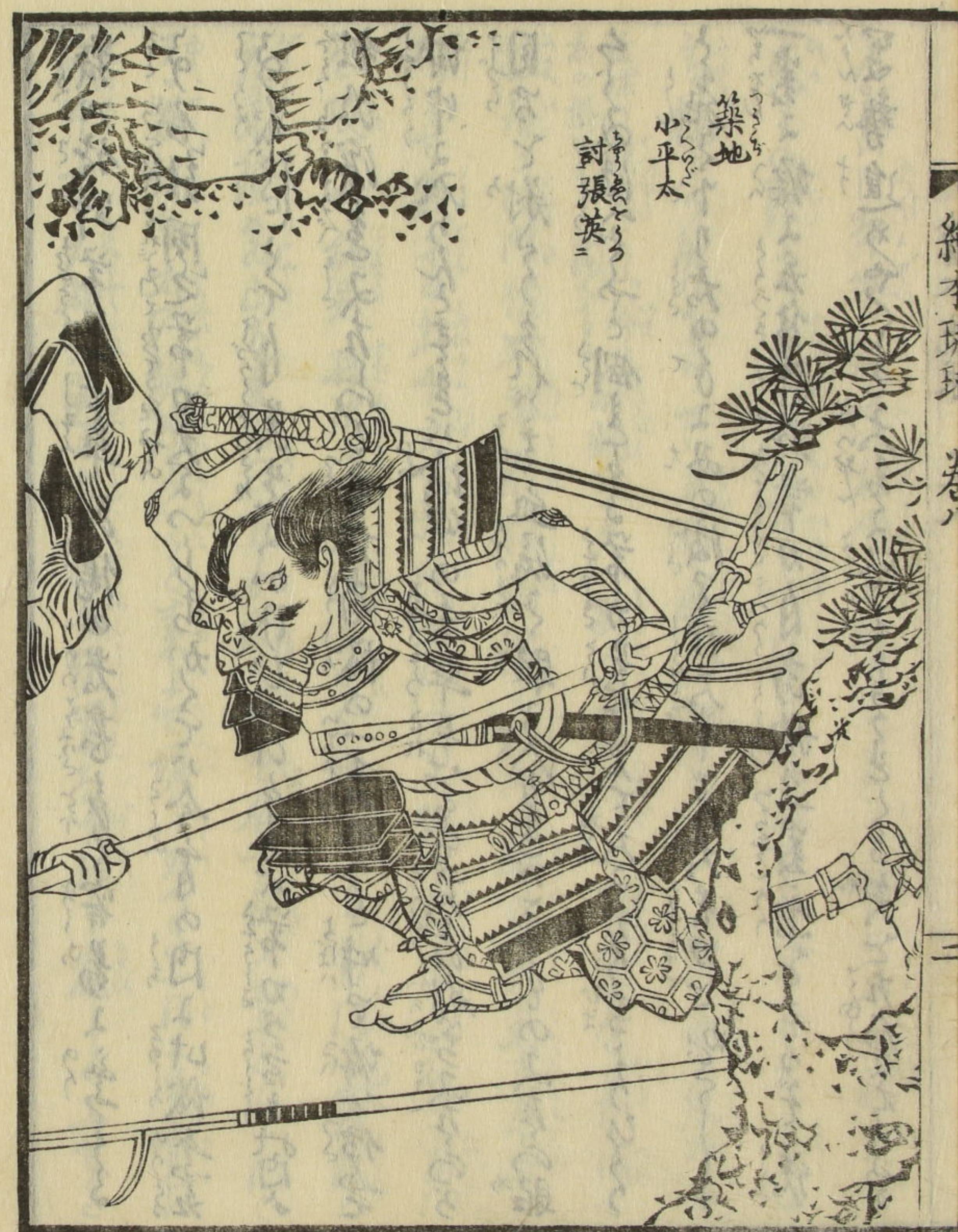
爰又金門の城と云ふは清風が嶺の山より見て山路の
 小橋より城を名射枝張英とらりのうらまの子下の
 玄年一ふたりの要隘離落城と云ふり大に驚きおそく
 防戦の用意をはくるる子下の軍勢は薩平勢の勇と思ま
 れけりよ是れ者大才と云まき張英力有せん能城
 て薩平勢と防がんをさるる如く忽城が周の声人るの
 空へまき大に驚きおそく款責あるるをいひて昨日の
 と思ひ今宵責あるるをいひて今宵責あるるをいひて

是日日本勢救子の松明を焼くつとて勢三子余諒中火の
 光の陰より色々の旗を千風よりかき立てて入るも公等
 多橋よりかけりて二百余人の勢と四方に配りて鉄砲の
 流弾を鉄砲より今今の石砲をうけ敵を竹百一打おろし長を結て
 松の旗をうけて異をさす
 控居るは附佐野帯刀伊周院と同時要漢城を打たせりて
 押せ救子の松明或の提燈おひじく焼く横田赤松の南門
 を攻させ佐野孫次郎より小門をまきせ自ら東門に向い後
 元来險峻山あり三方の周の声を合し長し余とくんと
 引鉄砲を打り城隙をくま上を堀よりつと一日は美上より
 城中より大お張英子息張赤佐軍を下知し麓よりあせりて

我は佐野帯刀が士卒死傷の甚多き容易にさす
 引る松周之帯刀大よりのちかくては今宵の内よけ城を
 引るがごとく自ら美先又かけむひくまきハ帯刀が言おけ内
 堀の深き又方りと云者高城の一畫のりと呼り堀と傳を
 城中より入らんときまきハ城中の美卒是とておぬに射せり又たのち
 目方と射りうられがす血流く船より入りまきハそののよたの船
 へりみ後へごとく倒まきハ帯刀是とて大よりのちりひり
 とおぬよりたのちよみの後より天斗りの大右刀をかき
 一畫より堀より佐野帯刀自高城の一畫をさす
 是勢進めやくと大まきハ好りたうとくも矢とたたかす



繪本琉球 卷二

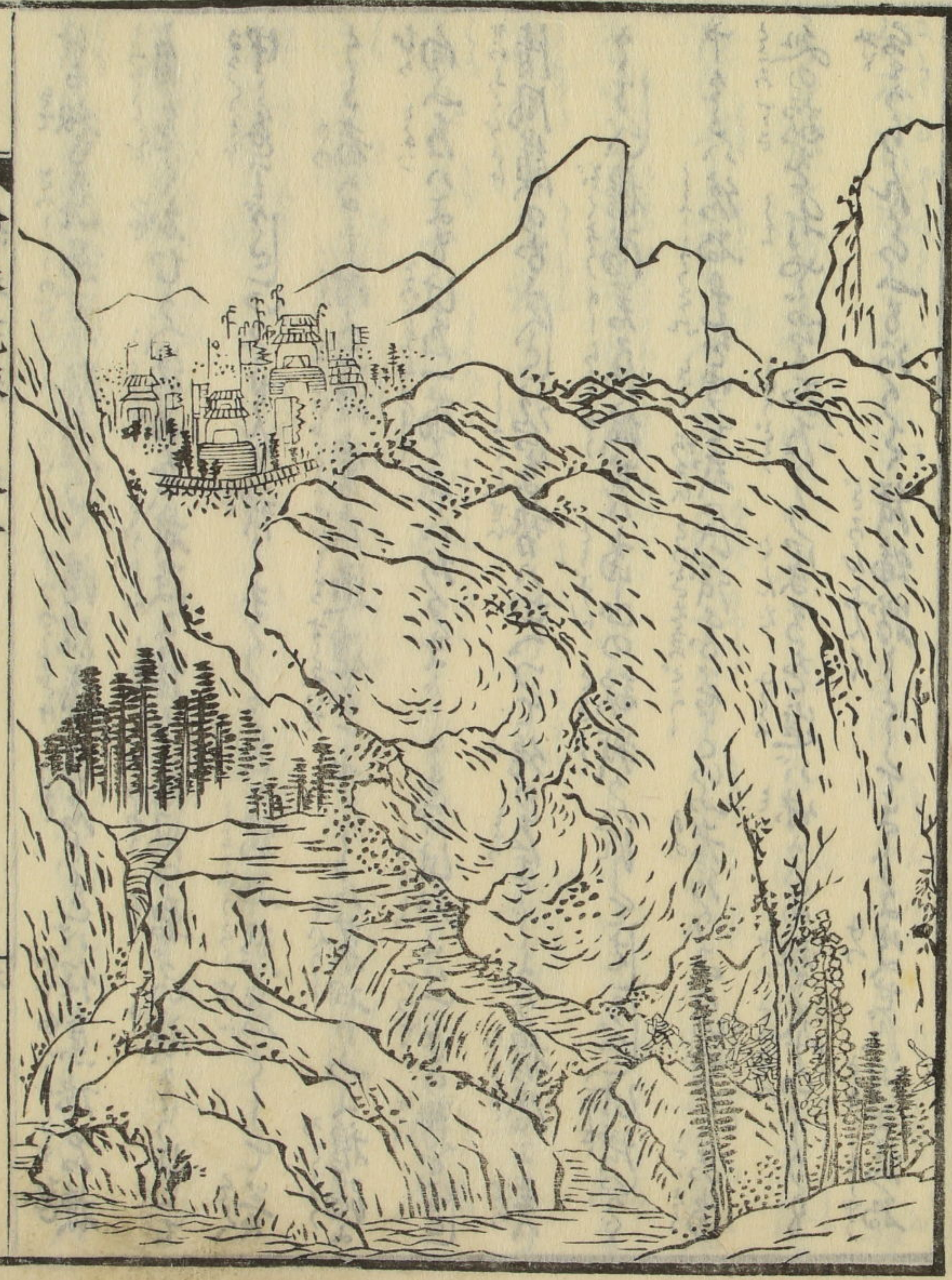


築地
小平太
討張英

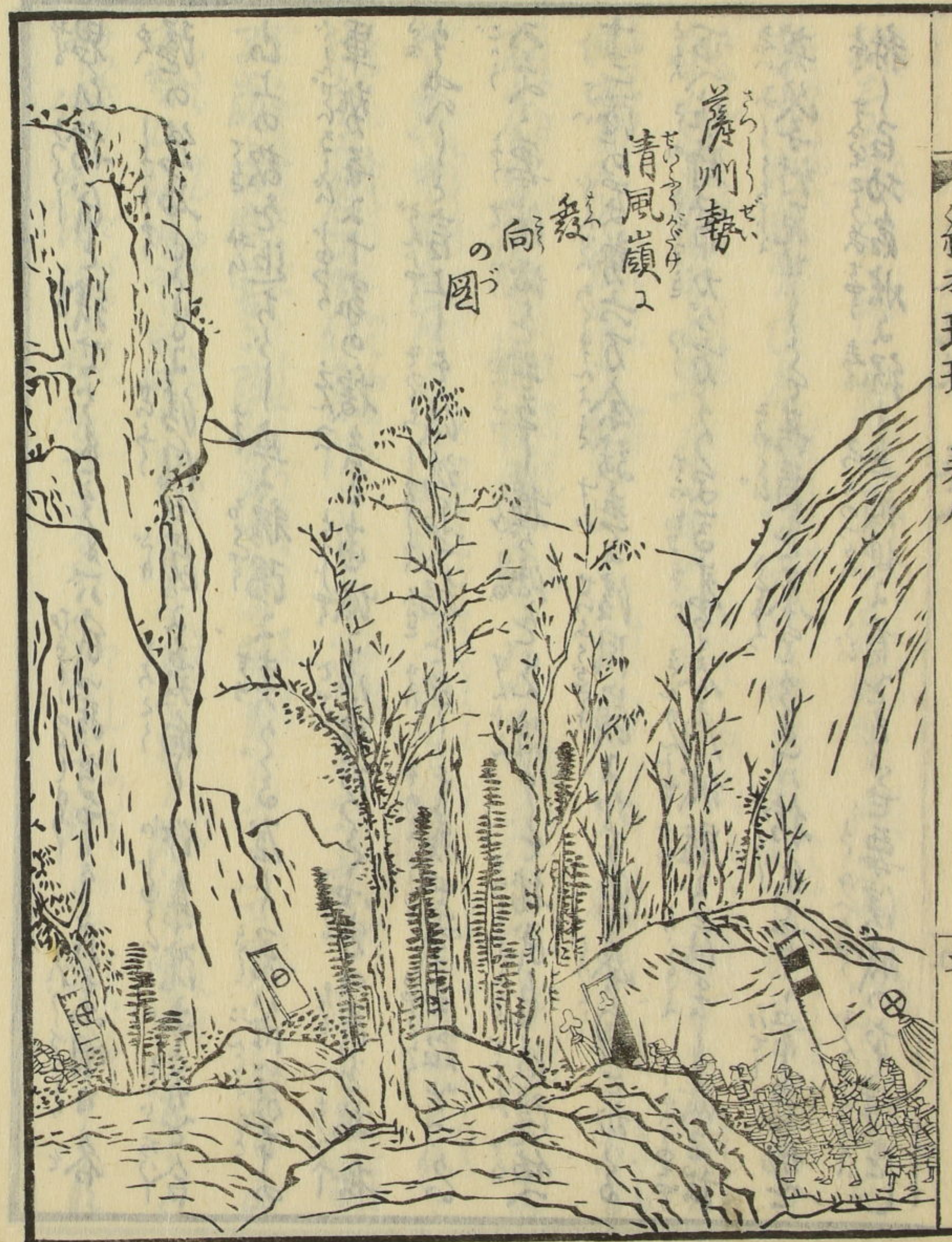
繪本琉球 卷二

款さる者も終に常力が手に落城せり附て天を明かんとて
東方漸白りけ夜暫附の戦い一切五首式百餘級生捕二百
余人の妻も士年九十余人討死し侍方お二人討せり常力
城中へ入る落軍を納めけし一應た久公に社をたれ物もあ
る志多かり久公ハ要溪灘の城よりつてそそ疾に落軍の當てやす
く身ハ中堂に座して夜終迄おと謀を強し清風願の事信と
侍々も勿忽まら伊集院が方より子る言上して千々を敵
に顔上の要害に隙を五味方の勢勇とてまゝにさるる山
の勢に後波おし中々まらるるありぬくハ星沙より一
斗降して後迄の勢を下るべしと權で中裁るもた久母うら

思ひ勝氏と縁せりまゝに武つあち中々ハ天来明日各
隊の佐也とも清風が願に致向し伊集院おと力を合
山上の款を迫ちり一應移陽にまゝくるるに不ハ此に於て
軍勢も二十家の様とて山城に居たりし四方の民を捕
まへりと言上しそ後迄おへ解を乞ふそそ夜四更に去船をつ
みろよ要溪城を出る種が船を先遣しそ勝氏自後迄佐へ
十三隊の安勢六万余騎を清風願よりむひて致向とてか
るに仇野常力が方よりまゝに金門城既と居るに城之強
英父子討死せしそ其首を奉りまゝに勝氏より一帯力が働
稱し百功名姓を録し止彼使し首とりて要溪城の本陣に



藤州勢
清風嶺
の向
図



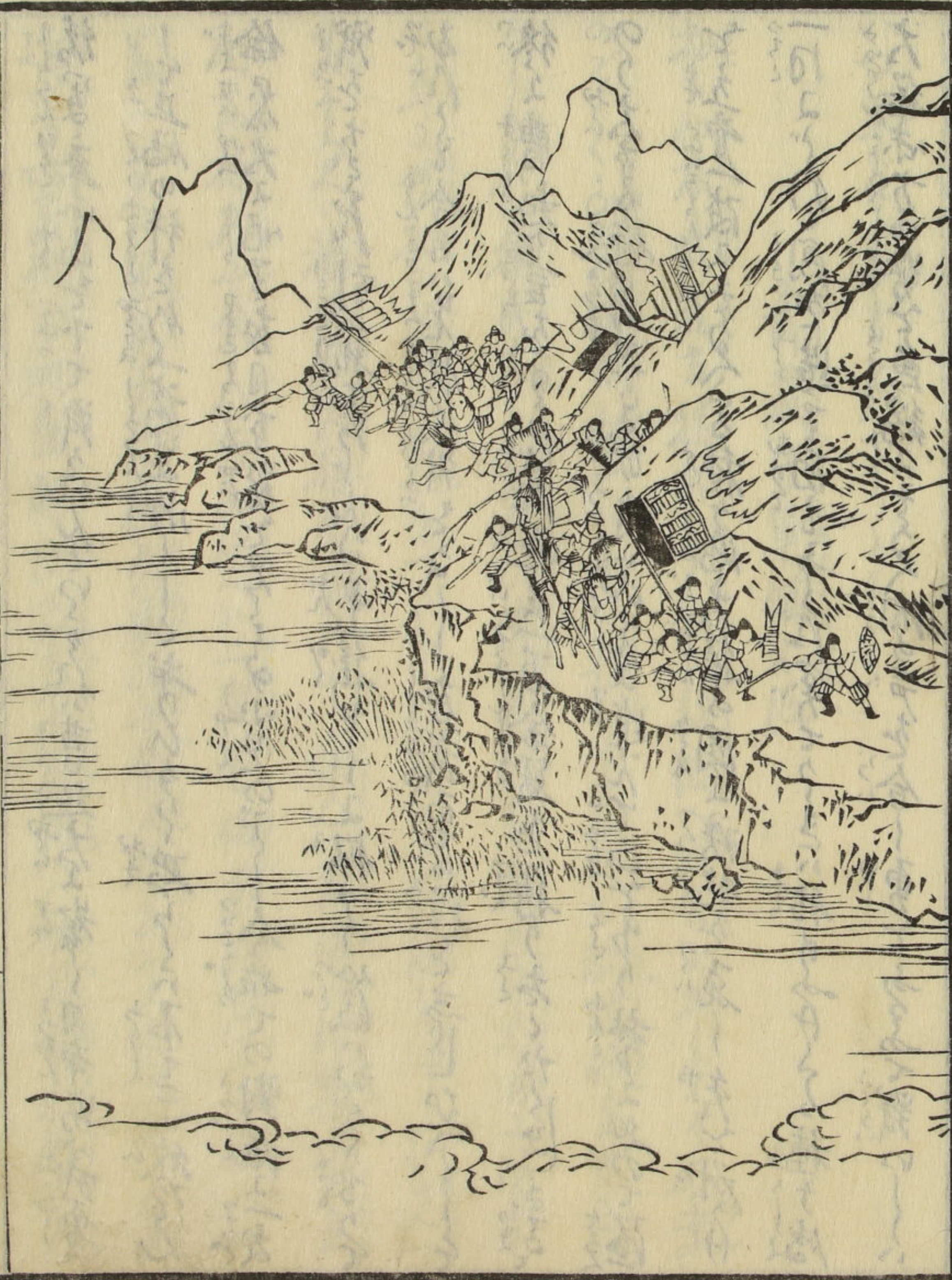
々まは武蔵守 波門とむ久頼 又 徳孝の功を賞し くれは
 帯カと云 新とまらむ 日復し 後武蔵守とむ久の軍師何
 が故よ かく山上の歌をまゝく ぬね 武蔵守と云て 歌今要らん
 よ門 防がんと 是をまんと せうの門 進まば 味方の格がら
 美々らん 業は せうの門 進まば 味方の格がら
 は どのふ お輝と 随分よ おたふよ むの 若 留日でも 軍師がら
 新 自其の 進も 只一息よ 山上の歌を 進下し 武蔵守の
 かどを けり けり べしと 心中 大なる 勇と けり

傳と曰く 仁本武蔵守 ちせん 要 漢 漢を おる こと こと こと
 濱田 加納 木を 召し 練の 卒 百人 けり けり

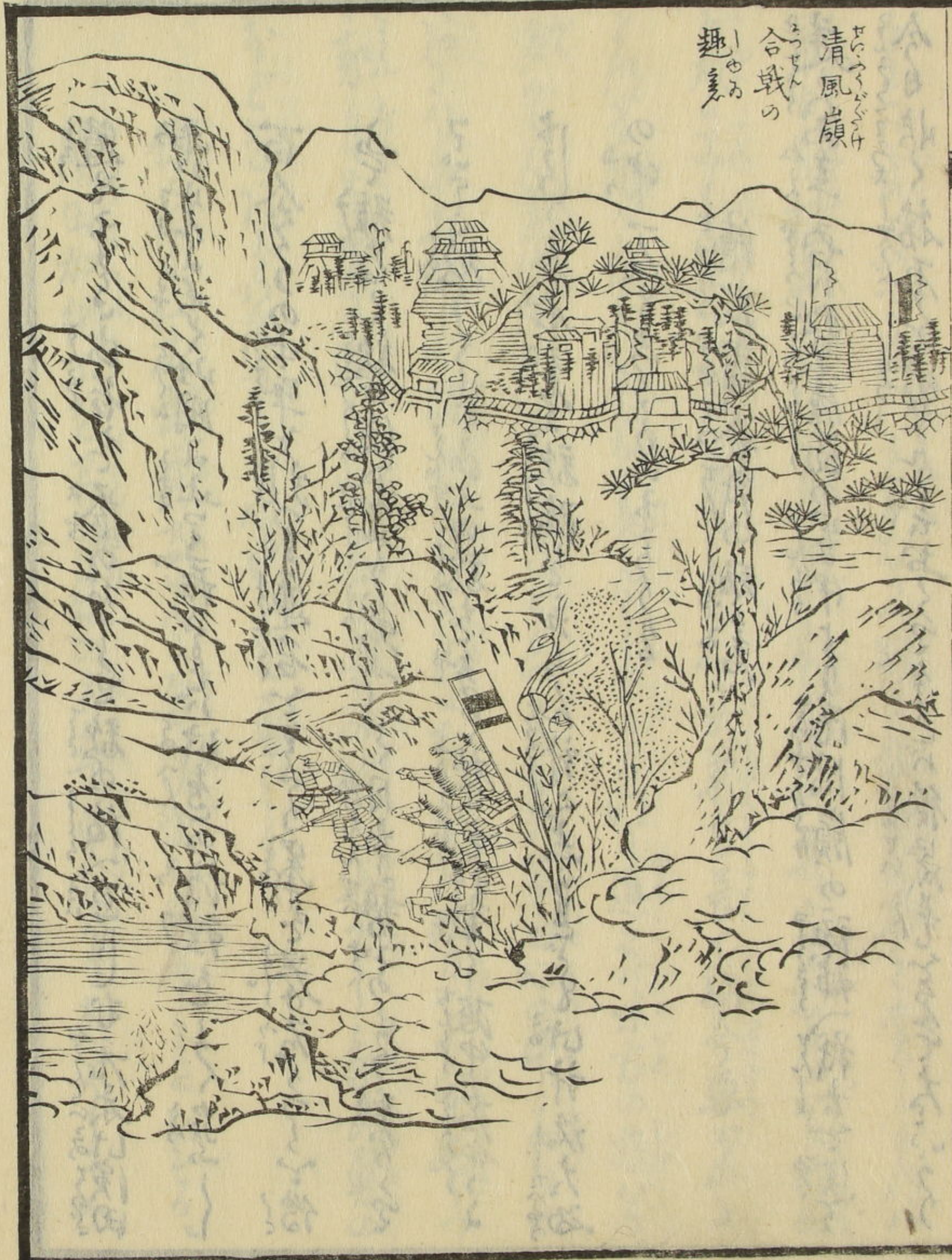
道も ちせん 山谷を 巻のり せ 歌の後 (白) じむ 元来 けり 濱田
 おは せん せん 此 國又 止り 居る 是は けり 色の 地理を けり けり
 百人 なるの 士卒と けり 連谷と けり 卒を 巻る けり けり
 ふを 難なく 歌の後 けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
 の けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

清風山嶺合戦の趣

建久の年 月 日 薩 品 の 軍 中 より 清風山嶺の 戦 去て 還り
 今日 快く 猪 首を 決せん と 云 おく こと こと こと こと こと こと こと こと



清風嶺
合戦の
趣



法軍率山を下て我軍のいんをいんが曹起を令し日本勢を武勇
 して其島の計をりし法軍は皆しくおひひり思ひしに不るの故に
 徐景大に叱りて其日本勢を令し小見のて今始ての對海に
 我をちまに引籠てりしを是に集せしと仰りし後いかに
 わんも今日先快く對をるし一勢武勇の程を志しむべしと
 終に曹起が言をりしに遂に一万余騎を携り去りたるに
 のり大なる他月刀とさげ月並の進んで心を作り持りしおのて
 とを舟一渡りしそりし種々大船の圍に珠炮を死し矢を射りけ
 一日の間の圍を造り而もあつた案てくまに持りし種々大船
 大船味方の勢と魚鱗とそりし圍の声を令し勇とあつて對りし

いつ果だしともさびざりたり

武藏守軍備十五

おもに本武藏守備氏に先斌と秋波へ對去とおくそりし業
 のごりし山上の秋山を下りて打あつて入て秋波のてりし
 がりしバ備氏大よるるに清風殿をたんに今日こりし
 て年々法軍の被りし下知をつるも配をちりしを侍りし
 美そりし種々大船を明りし千余人二萬倍ハ併集沈在
 尉右様みり余人三萬倍ハ二階半倍前右三万余人四
 數そりし里見大内系久秀に子余人五萬そりし
 近江守六萬倍ハ畑助解は左房七萬倍ハ秋月古の尉之左

三子余人ハ其後ハハ本三官方ノ尉三子余人ハ其後ハハ尾集人
正備邦三子余人十蓋そそノ安陣仁本武勇ヲ備氏に子余人
是を籠本の中置と為依ハ佐野常力政賢俾勢求る長一各
二千余人子分既とてさりりバ陸軍をくノ又款をまら
佐野常力ハ又そそ入へる成る是バ常力心中ふく懐てそそ也若
二つたさそそ且バ務氏密々そそ常力をまねそそ素直そそを後と依
ハあちる款と商らそそたかつそそ一たさの協力をまのそそあらん
ろりそそ款ハけそそろと南とまそそ二十里たろりそそ一の城ありそそ
と籠そそ城とそそ今日若合戦そそそそそそそそそそそそそそそそ
を半そそ味方ろりそそとそそん必定ろりそそ所色色そそそそそそ

け款よりろり座と進んで就雲城をまそそるなりそそ而今日の大役
功名の第一と味方の後おもそそそそそそそそそそそそそそそそ
城をまそそるるハ是下只一と某元未是一の右勇あると知そそんバ
いろちかく大任を中付んやそそそそそそそそそそそそそそそそ
用意をそそん琉球の希軍也軍徐果ハ務氏が戦去とめてん中
ふろ懐て終つ曹起が謀をりちの代曹起と五子余人をそそそ
清風虎と跡そそ其勢相合まそそ方又子余務都正楊文元を
左と右そそそそ帯の系ハ押牛徐果自先使と依ハ都正楊文元
又二子の勢を併て後と跡そそ一月万余騎を引率し勇力と勇ん
て押も後と友遊鶴そそそそ合そそけ徐果といつものハ勇糧



琉將徐晟
和軍十段
備へと破る
の
圖

繪本琉球



繪本琉球

卷八

兵双の引おちるに消きつゝ、士卒あらはくすむに
 三つうまうそと勢種虎のく元春より下と勇士十
 八人なり皆中山省東山省のあつらひみせし者
 ともちまは馬強く人難んかゝる威風凛々たる人
 たる人なる徐景はるるに日本勢の版をば使するを
 て後すや向ひて中なるをけ款を破るるに長蛇に依へた
 一筋の突入る、文より右ををくへるるに西面を切らる
 事よ款をの籠中と押拵格負と一筆に交まると下知
 と信へり、自ら進め勇いといふに押すもたは後
 兵の先陣種ヶ嶋大橋三子余人を介くと後出

お成矢更ごをわねむと決死をつゝ敵に子合戦をなす

徐景大破日本勢

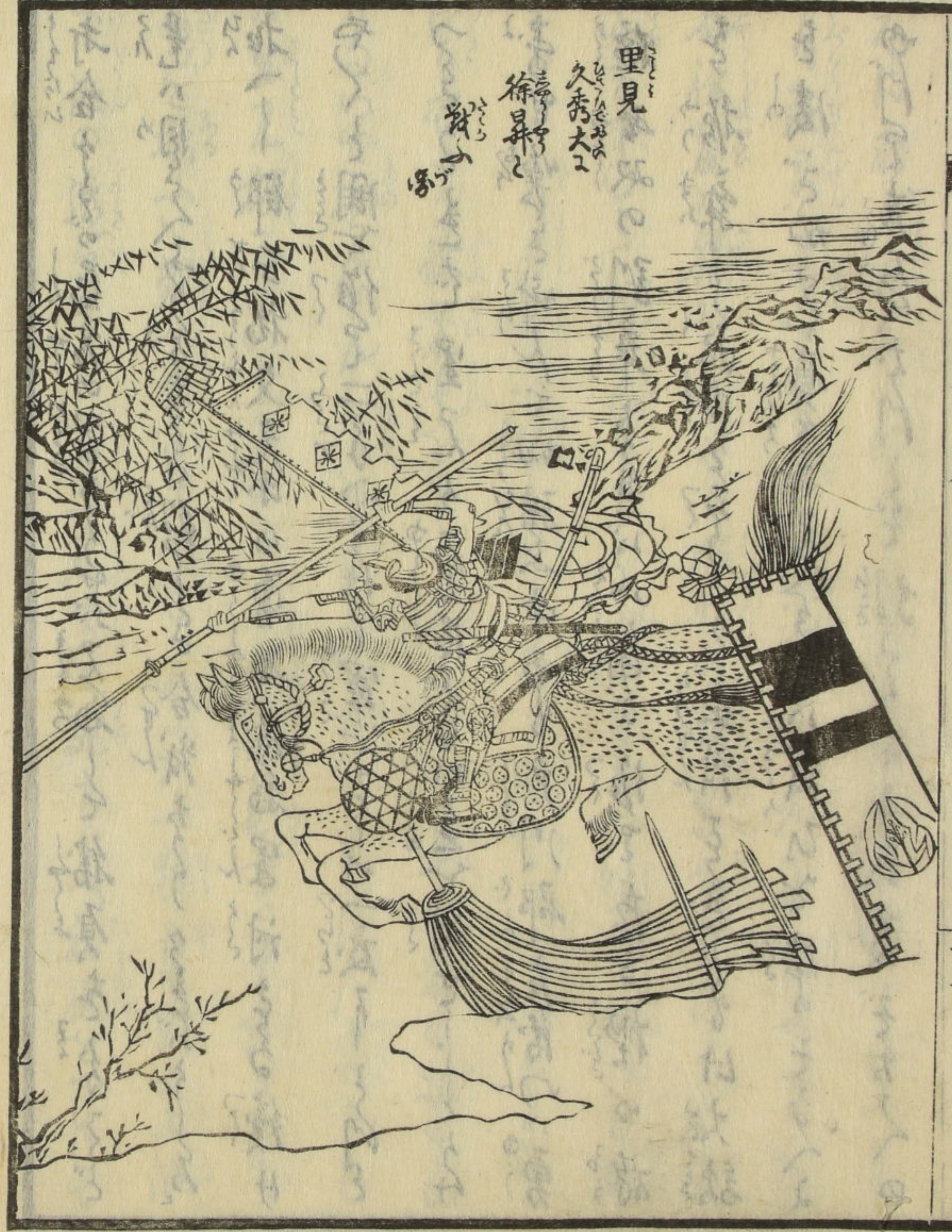
薩兵の先陣種ヶ嶋大橋を介するに自のおまゝに白糸
 織の獲を著し、抱ちりよ令の丁をまきまゝとあつらひて
 戴とまきこころの鼓を、騎をみあつらひ、四矢をうり、大
 長刀とさげやりたるを、おまゝに、細も和流の先陣
 耳に鐘を告せ、管付てお成の徐景財分りしと、かたて
 ちたをそとく、あつらひ、母の飯と中知く、抱け、ハ勿事
 友方より、敵百挺の弩、雨より、あつらひ、おまゝに、種ヶ嶋
 士向をむ、へ、あつらひ、た、あつらひ、た、あつらひ、た、あつらひ、た

徐晟いよしのをたふしてすらや勇戦ゆうせんはくもたうをも進すすめやくくと
 下知げちをさくし自儘みづかみ月刀げつたうとぞつたどりとおりのて突つく
 といふ紙し下の勇士ゆうし許俊きしゆん李應解りおうえいげ首しゆ文ぶん紀き范はん慶けい張ちやう世せい
 元げん木もく得とくおとくを打うちあつて二に女にょ三さんの突つ立た切き立た勇ゆう断たんたれ
 大だい据よ自じま刀たうを据よく向むかふ都みやこままま切きくおとく味あじ方かた
 下知げちを戦いくさへども元もと木もく大だい晏えんと云いふと文ぶん武ぶ堂どうをたれ
 持もちたるの敵かたきとんぐの破やぶき右みぎ佐さ大だい性じやうと天てん孔くわうとくも
 こそ落おしの二に女にょ三さんの体たい集しゆ院いんた棟とう二に女にょ余よ人にん種しゆを傳たづね
 代かて體たいをいふ捨すておとく士し先せんをさくしてさくもたれ
 下知げち集しゆ院いん陣ちんへ面めんもあつた突つて入い切き立た標ひょう立たその

えがくとも靈れい光くわうのどく伊い集しゆ院いんた棟とう大だい工こうのり月げつらむ
 敵かたきとあり後ご卒そつをり知ちて戦いくさへども後ごありぞく
 たがくもりし子こたをさりと引ひきあつて二に女にょ三さんの
 半はん使し者しやあつた二に女にょ三さんの余よ人にん種しゆを道みちり後ご院いんを打うちけ岡おかを
 傳たづねおめき叫こゑんであつて徐じゆ晟せい何なにもあつても
 たりりふべと大だい殺ころ一いつ度たおれとおあつて體たいをさくもさくへ
 二に女にょ三さんの突つ立たまは二に階かいをさくよまはつて五ごつたあつて
 あつてすまし徐じゆ晟せいをえりけて引ひてさるさる後ご院いんを
 くもあつて月げつ刀たうをよて打うちくくも二に階かいをさく
 傳たづねも突つ立たまは二に階かいをさくもあつて引ひてさるさる後ご院いんを



八



里見
久秀大
徐昇
家

繪本
卷八

十五
十七

志^しテ^ま近^{ちか}ク^き余^あノ^の人^{ひと}星^{ほし}見^みカ^かラ^らシ^し港^{みなと}を^を
合^あハ^はシ^し徐^{じゆ}最^{さい}ガ^が勢^{せい}ハ^は薩^{さつ}良^{りやう}勢^{せい}ノ^のそ^そノ^の四^よ方^{はう}ま^まま^ま
打^うチ^ちヲ^をリ^り勢^{せい}ノ^のつ^つら^らる^るま^まま^まと^と譯^{やく}先^{せん}都^と正^{せい}揚^{やう}文^{ぶん}
元^{げん}ガ^が勢^{せい}を^を先^{せん}ニ^に進^{すす}メ^め迅^{じん}風^{ふう}ノ^のつ^つら^らる^る也^{なり}
く^くト^ト勢^{せい}昇^{しょう}勢^{せい}ノ^のつ^つら^らる^る也^{なり}

繪本琉球軍記卷之八終

